

〈研究ノート〉

圓仏教におけるホスピス施設概念の研究

神 居 文 彰

はじめに

人がその自らの命を終わらんとする時、一体何を必要とするのであろうか。

人が死を理解するのは他者におけるそれと、当然それを通じて自己の死の問題としてたぐり寄せようとする状態が発生する。たとえば、二十五三昧会等においては、古代日本の看取り組織において、すでに他者への看取りによって、自己の死に様を構築する機能を有することが確認される¹⁾。

では、そこに死に往くものから生者として残るものに何が伝えられるのか。さらに、死に往くという状態に人は何を求めたのか。死はあくまで個の問題であり、その状態は一様ではない。そして、ホスピス等施設として死に際を設計する場合、そこに最低限何が必要とされるのであろうか。

「日本ホスピス・在宅ケア研究会」では、1999年の全国大会（岡山大会）より「市民ネットワーク部会」を立ち上げている。

この会は、特に患者や市民が主体となって、コメディカル、法律家、教育、宗教者等関連する諸分野の参加を呼びかけるという形で発展した研究会の一つであり、現在、正準会員総数、1054名を有する（2002年12月現在）。

その徹底討論のなかで問題とされたのが、ケアに対してペイン（痛み）という言葉を用いることが適切であるかという問いかけであった。

つまり、ケアとは何なのか。スピリチュアルペインの対語としてケアの語を充てることが、果たして妥当であるのかということが問題とされたのである。それは「スピリチュアル」の適正な訳語が充当でき得ていないことにも遠因があるように思う。なかには、心の欲求＝ニーズとしてすでにケアが存在するのではないかといった発言

1) 神居以下3名著『臨終行儀』（1993年・北辰堂）参照。

も呈せられ、問題点が絞り切れない分、如何に精神的な部分へのケアの扱いがデリケートな問題を含むかをうかがうことが出来る。

さらに部会での近年の討議では、告知の問題が長く議論されている（2000～2002年大会）。

それら市民運動を組織しているグループからは、ハードとしてホスピス的な緩和医療施設の設置と適切な末期医療が望まれる反面、会の報告では、多く家で死にたいという望み＝在宅での死という切実な希望をも表せられていた。

では、ここで望まれる「家」に果たして何があると理解すれば良いのか。家という施設と末期医療施設それぞれを求め、携わる人々にとって、よりプリミティブな部分では、真に何が求められているのか。

さて、市民のための市民運動は、人間的権利を問うものであって、市民的権利を勝ち取ることだけが究極の目的ではない。

これら市民運動の実践者からは、宗教的行為による、末期という時間に関する実際の指標が強く求められてもいる。

穏やかな死の場面への希望。しかし、信仰が「安らかな死への援助となる」という言い回しへの危惧も、一方で存在することも事実であろう。

自己の苦しみを他者と比較することは容易なことではない。しかし、それ以上に他者の苦痛を自己の問題とすることは難しく、多分に古くから伝わる宗教的实践の中にそれを確認することが出来ることも事実であろう。

本稿では、2001年2月論者が所属した佛教大学総合研究所による韓国における仏教系末期医療施設訪問調査により得られた韓国特に圓仏教における看取りの基礎資料と、施設より看取されたその基層文化についての可能性を論ずるものとし、すでに論者が提示する「日本における看取りの要件」²⁾を理解するための比較検討材料としたい。

1

韓国には国立及びキリスト教系私立その他による複数の複合型末期医療施設が存在するが、「独立型」の末期医療施設としては、唯一益山市圓光大学校付属施設以外設置例がない（2001年2月現在）。

益山市は、大韓民国南西部の全羅北道に位置し、面積506.7km²、人口332,493名

2) 平成11年8月31日日本看護史学会発表。

(1998年5月現在)の石材、軽金属を主要とする商業都市であり、平均気温13度ながら約12% (63.1km²)の耕地面積から米小麦瓜などを生産し、ソウルより国鉄を通じ主要ターミナルである裡里駅まで特急で約2時間を要する。西側には錦江が流れ、周辺には落日の景勝地も存する。

市内には総合病院2棟、一般病院115棟、老人福祉施設5棟、介護福祉施設4棟、その他の福祉医療施設をもつ。

圓仏教は、1916年後天開闢の主世聖者少太山大宗師(朴重彬1891~1943)によって創立された。思想的には一円相『○』を真理かつ象徴とし、あらゆる存在の根本とする。

この点について二代鼎山宗師(1900~1962)は、「言語と名相が断絶された境地であって何をもってもこれを形容することはできない。しかし、形而下的には宇宙万有はこの「円」をもって表現されるので、これはすなわち万法の根源であると共にまた万法の実存である。ゆえにこの世に存在するあらゆる教法は、たとえいろいろと表現を異にするだろうが、その実際においては「円」以外にはまた一つの法も存在しない」(鼎山宗師法語経緯編第一章)と語り、具体的には教育面で圓光大学校や圓光保健大学の設立、福祉面では1945年戦災救済施設として「ソウル」に孤児院を設立し、本部構内に療養院と東華病院(1950年)、1953年に裡里に孤児院を設立している。

これら一円相自体を信仰することにより、あらゆるものとの連携連帯を導き出し、「恩」を中心に教化、教育、慈善の三大事業を基本活動として標榜することによって実際の社会活動を展開するのである³⁾。

2

さて、益山市圓仏教総部に近接する形の圓光大学校から市内に数キロ入った処に独立型末期医療施設「圓光ホスピス院」⁴⁾が建つ。地上3階地下1階延べ面積300坪

3) 柳柄徳「圓仏教の韓国社会に及ぼした影響」(坪井俊英博士頌寿記念『仏教文化論攷』所収)参照。

4) 第一生命経済研究所(ライフデザイン研究本部)副主任研究員・小谷みどり氏より村岡潔研究代表が得た情報では、「圓光ホスピスの件ですが、昨年(2002年)現在でベッドは25床でしたが、ケアができないので、20以下に押えているとのことでした。スタッフは、医者(内科、眼下、外科、循環器)5人、看護科3人(ホスピス専門)、宗教者、ボランティアの計15人。病院全体では(内科などもあるので)、ボランティアが40人に看護婦・看護助手が6人ということでした。延べ床面積は分かりませんが、地上3階、地下1階(地下は玉山家という場所から持ってきたジェイドを敷き詰めた部屋。気を入れるらしい)です。救貧対策のホスピスを目指しているので、医院ではなく、病院にすべく、昨年4月時点で増設工事中でした。今の状態の医院だと、貧しい人でも2割は自己負担しなければならない」



写真 1

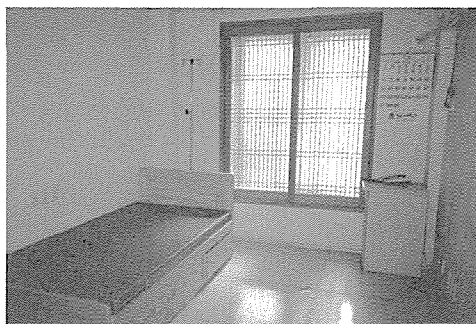


写真 2



写真 3



写真 4



写真 5

(約991.5平米＝韓国の1坪が6尺平方による)。ガラス張りで突き出た形で施設の左寄りに「○」を冠した玄関が開く(写真1)。施設の専属僧である安善珠・教務への

／ め、生活保護者は無料となる病院にすべく、敷地内では増築中。現在で4年目ですが、250人ほどの看取りをしてきたそうです。」とされる。

ヒヤリングによると、臨終を当施設で迎えたのち、死者は来院者と同じ玄関から個人の居宅に戻るそうである。スタッフは他に、医師である院長、副院長（以上が設立者）、尼僧で看護師でもある季女史、さらに運営費の調達などを行っている後援会の会員が、医師3名、看護師6名など会員250名を数える。

施設は25床、個室7、特別室1、複数人室3、当時13名在院、在院期間は、1週間から3ヶ月だそうである。また、末期医療に関わる最新の設備が設置してあるが、オンドルなど随所に地域に合致した設えが施されている（写真2、3）。

院の3階に圓仏教の仏間として一円相が掲げられている（写真4）。

臨終者への看取りやは、各部屋にて実施されるようで、仏間はむしろ日々の礼拝祈念に使用される。

注目することは地下にある「玉石の部屋」である（写真5）。

一種の瞑想室であるが、周囲が玉石で覆われ部屋の中央にカーテンにおいてパーテーションが張られ、状況に応じた当該室の使用を多元化している。すなわち、瞑想、個人気功、集団気功等である。

この玉石によって大陸にある「気」が病院全体を満し、穏やかな日常を過ごすことができる」と説明を受けている。

市内の聞き取り調査（2月14日13:00～）で、当施設と玉石の部屋およびその効能の関係を回答できる市民が複数存在したことに留意すべきである。

このことは益山が石材を主要産業とすることのみならず、韓国の石の文化・信仰の現れといえるであろう。

末期医療施設で死を迎えられる方が、一種の俗信とも取れる設備と動態を、最新の医療施設内に要素として取り入れる。

2002年日本の厚生労働省研究班が実施した国公立のがんセンターをはじめとする専門病院、ホスピス等127施設を対象とした（有効回答、3,914名）はじめての全国的「民間医療」に対する実態調査によると、全体で44.5%、うち末期医療施設における61.8%が民間医療を試みているという回答が提出されている（米国議会の技術評価局 Office of Technology Assessment）の「がんの民間療法」には食事療法・精神療法・ハーブ療法・免疫療法精神療法など20例におよぶ民間療法の実体と臨床的な評価がまとめられ、台湾大学病院やロンドン大学病院においても同様の調査が行われいずれも、同様の数値を提示す）。

すなわち、現在、一方で民間療法の流行が我が国でのガン治療率の低さの主要因の一つ危惧する医療者がいる反面、民間医療という非証明医療を多元的医療と捉え、

有効な代替医療と位置づけることは可能であり、代替医療が明らかに副作用等患者に不利益になる場合以外、末期治療をそれらの統合医療とすることも視野に入れる必要があるのかもしれない。

しかし、症状改善や緩和への期待による応用と、末期における安穏な精神を約束する韓国の当施設におけるそれとは、本質的に意味が異なっているといえ、命の最期をどうケアするか治療を越えた精神の安定を約束する。

3

韓国において最古の記銘年の存する「延嘉七年銘金銅如来立像」(539年)は、北魏等中国内部の様式を踏襲しつつも、細長い仏身、地下強く左右に広がる衣端、圧倒的な後背、大振りな蓮華など韓国的様式が反映する。7世紀に近くなると半跏思惟像が誕生する。

部材として、金銅、塑像・石像が多く見られるが、統一新羅以降、「瑞山 雲山出土鉄造如来坐像」など鉄仏の造像が目立って注目され、高麗前期では鉄仏と石仏が多く残されている⁵⁾。

この石を素材に使用するということは、石からすばらしいものが現れると信じられる霊石信仰及び大地に関わる信仰からと受けとることができる。一方日本では石を使った仏は少なく、やはり霊木の信仰を念頭に考察すべきであろう。木から何か奇特ですばらしいものが生まれるという概念である。

日本で鉄仏が積極的に制作されるのは鎌倉時代である。鉄は鎧甲冑、すなわち戦闘を連想させ、力強さを表現するものでもあり、時代の持つ意味が素材に落とし込まれていると言える。

これらの点から、信仰対象である仏像の素材がその時代や場所の意志を大きく反映したものであることは分明である。先の圓光ホスピス院の玉石の部屋による精神の安定と浄化も、素材の持つ意味から読み解く必要がある。

さて、従来、釈迦弥勒等の如来に比して従来より薬師如来の数が少ないとされるが、

5) 姜友邦『韓国古代彫刻の原理Ⅰ 円融と調和』、『同Ⅱ 法空と莊嚴』(原ハングル)、中央日報「季刊美術」黄壽永責任監修『韓国の美⑩ 仏像』(原ハングル)、『国立中央博物館』図録 日本語版、『国立扶余博物館』図録 日本語版、『国立金海博物館』図録 日本語版、『国立慶州博物館』図録 日本語版 参照。

薬に対する信仰は初期仏教の四事供養の一つに挙げられるなど、病への処置としての具体的な対応と効能から、仏教伝来以降、韓国においても金銅仏・石仏等に古くは6世紀頃からの薬師如来が薬壺ないし、薬龕をもった姿で現されている。

もともと、薬師如来に対する尊容についての経軌はなく、様々な印相や持物、立座の像が現わされ、統一新羅以降、他国にはない降魔印の坐像も流行する⁶⁾。

但し、不空訳『薬師如来念誦儀軌』一卷には、「安中心一薬師如来像、如来左手令執薬器」とあり、中国では、隋代以降に信仰の高揚が確認され、雲岡石窟11窟、龍門古陽洞、敦煌莫高窟148窟、417窟、220窟など100近い薬師変相があり持薬する尊像もある。

韓国の例では、ソウル国立中央博物館蔵「青銅薬師如来立像」(6世紀)は薬盒、同中央博物館蔵「石造薬師如来坐像」(8世紀末)は薬龕。同館蔵「金銅薬師如来立像」(8世紀)は薬壺をもち、時代が下がって14世紀長谷寺金銅薬師如来坐像も大きな薬壺を執るなど長くその信仰が続いたことは、信仰史の面から見直されても良いであろう⁷⁾。治病への具体的な姿態と信仰表現は連関するのである。

4

現代の韓国において仏教と医療の関係は如何なるものであろうか。

ここで、未邦訳の朴淳達・呉亨根・曹勇吉・金成九共著『仏教と自然科学 物質・宇宙・生命観を中心に』を翻訳し、その思想方向の一端を探るものとする⁸⁾。

本書は、仏教の物質論を四大説から説明し、縁起観を通じ他者との関係性と精神の問題まで言及する。総じて、今生きる人間の価値と死後の連続する命に展望を持つ展開である。

すなわち、「仏教の絶叫は唯我独尊だ。それは、生きている確信の象徴でなくて何か」といい、「(生死)の世界を超越したことが涅槃、はじめから生死の世界はないほうが」と古代高麗の僧が焼身する例を卑属で無理解な証例とする。

続いて、宇宙論、素粒子論等を俯瞰し、仏教の生命観を時空間との関係として、

6) 伊東史朗『日本の美術7 薬師如来』参照。該当書においても、韓国の薬師如来として積極的に図示されるものはない。

7) 薬師の眷属の薬王菩薩は薬壺や薬草を持った形で現され、来迎の二十五菩薩に同菩薩名が確認される事がある。薬を持って来迎という点、救済を考える上で大変興味深い。

8) 日本の川田洋一『佛教と医学』がハングル訳されているが、臨終の三愛についてなど、死の直前の意識について唯識的で弱者への救済がこれをもって敷衍したか不明である。

「物体の姿だけを認識するためにその姿の好悪（好悪）に執着するようになる。」といい、「天地与党我同根」から、「からだと心（気持ち）は天と地と根が（に）お互い同じだということである。したがって宇宙中にある森羅万象は表から見ることは、お互い姿が違うために各々孤立になって、存在することのように考えることが（中略）天地と人間の根が同じだということは本性と本体が（に）お互い同じだということの意味する。」と説明する。併せて「業」の問題及び輪廻説から輪廻の主体は転生せずとして、生死の連続として輪廻を理解する。

しかし、常に超越する命を「永生に対する所望とその実証を宗教上で（に）責任を負うべきだということはどうしたことであるか。」と疑問を投げかけ、「四門出遊」の伝説についても「超越した靈魂の存在を信じたのだろうか？」とし、「仮りにその課題も宗教家を完遂する義務というならば」と常に、現世主義と来世至上主義両者への警戒を怠らない。

本書は、生命の実相として、「人間は死ねばどのようにのか。死ぬ瞬間に死体（肉体）と肉体でないことに分けられる。」として靈魂的なものを認めているが、自然科学の生命観の変遷を並列することにより、仏教思想を有機的に、現在の生命科学として説明する試みを模索するようである。

何れにせよ、これらの出版からは、韓国にある転生観と現在生の尊重観念を読みとることができるものである。

5

ヒヤリングにおいて当施設における臨終に読誦するものおよび指針とする部分を圓仏教の聖典『圓仏教全書』（本文1160頁：原ハングル）より提示された。本書は、『圓仏教經典〈正典・大宗經〉』として李殷哲により前半部が邦訳され、1980年圓仏教教化部によって、家礼と教礼の全ての礼法の手順をまとめたものとして『圓仏教禮典』が全書の後半部を中心に邦訳されている。しかし、省略された部分や読誦經典として体裁が整っているわけではなく、読誦にはボイスセラピーの側面が存在することを前提に、実際の臨終の場面を想定し、かつ、臨終場面の教導書として活用することを主眼に原文から論者による直接邦訳を試みてみたい（なるべく原文に忠実に訳したが、意味の通じにくいところは論者による意識を加える）。

第六章 葬 祭（喪葬）

第一節 葬儀式に対して

葬儀は、人の一生を終えて、お送りする仕事で、親近者にあつては、その無念さが比べようもないことです。当人にとっては、この身体を捨てて新しい代りの身体を頂く時期で、必ず正しい薦度（引導文）を得る（もらう）べきです。

したがって、その儀式中に、2種類の意義があります。ひとつは親戚・知り合いを主にしてその生前の個人の正鵠（情曲）を想い、それを揃えることです。もうひとつは、亡くなった本人を真の涅槃と薦度を祈願することで、この2種類がみなこの「理」として当然必要で、ひとつが欠けても円満な儀式にはなりません。

しかし、その中にも主と従を分けるならば、薦度を主にして、儀式に従うようにすることが望ましいのです。

第二節 涅槃と涅槃式

1. 人が涅槃に近い時には、自身でもその周囲にいる人も「涅槃の道」（世典）に従い一層真実に励むことです（履行する）ことです。
2. 人が涅槃に入ったことを聞けば、周囲の人は静かに故人の手足を伸ばし、白布で屍体を覆って、場内を整頓し清浄にして、周囲を静粛にするように。
3. 涅槃した室内の空気を涼しくして、屍体の貞潔に注意するように。
4. 万一涅槃の人の病気が伝染する心配が（に）ある時には、涅槃前から消毒に注意して、消毒または入棺が終わる前には、読経する法司や弔客を直接屍体室に案内せず、別に写真奉安所を設置して、儀式を行うようにすることが必要です。
5. 涅槃後、約1時間を経過したのち、関係人が一斉に集まって涅槃式を挙げる。それは、1分間坐鐘や鈴を鳴らし、次に1. 開式 2. 立証 3. 心告（礼文24） 4. 聖呪三編（便）（礼文3） 5. 薦度法文（礼文4・5） 6. 読経（誓願文・心経） 7. 念仏（5分乃至10分間） 8. 閉会の順とするように。

【聖 呪】

永天永地永保長生 万世滅道常独露

去来覺道無窮花 歩々一切大聖經

6. 薦度法文は原文本（礼文4）と敬語本（礼文5）の2種類があるから、各々その場合により適当に選択して使用して、法階正師以上になった方の霊に対しては教礼編教儀5節7項の場合を除いて、初終に一切行事その朗読を省略するように。

【薦度法門】 原文本

〈涅槃前後に後生を引導する法説〉

〇〇よ、心して私のお話をよく聞きたまえ。善悪いずれにせよ、汝がこの世で受けた業報は前世の宿業の報いであり、この世で作った業因は来世に受けるべき業報となるもので、これ、すなわち大自然の天業である。仏と祖師は自性の根本を覚得せられ、心根の自在を得られ天業を除破し、六道・四生を己が心のままにすることができる。しかし凡夫と衆生は自性の根本を悟らず、心根の自由を未だ得ていないので、この天業に引かれて無量の苦を受けざるを得ん。斯くの如く仏と祖師や凡夫と衆生や貴賤と禍福や寿命の長短は皆汝がみずから作るところなり。〇〇よ、一切万事皆汝が作ったものであることを、今はっきりと知ることができた。

〇〇よ、さらに聞け。仏も汝も一切衆生も生死の理は皆同じものであり、本性もまた同じく本然清浄な性であり、円満具足な性である。性はあたかも大空の月と同じく、天空の月は天空に独り輝けれどその月影は一千の江水に映るのと同じく、この宇宙や万物もまたその根本は本然清浄な性において名もなく形相もなく、去ることも来ることもなく、死んだり生れたりすることもなく、仏も衆生もなく、虚無、寂滅もなく、無いという言葉さえも絶えたものであり、有でも無でもないそのものであるが、その中から有なるものが無為にして化するが如く自性に生じて、宇宙は成・住・壊・空に変化し、万物は生老病死を繰返しながら六道と四生に変化し、日月は往来して昼夜を変化させるのと同じく、汝の身体が生れまた死に往くのも変化にこそあれ生死では

ない。

〇〇よ、よく聞き感じよ。これで性の本来をはっきりとするべし。

更に開け。

これから先汝がこの身を捨てて新たに身を受ける時には、汝が平素好んで作った業因にもとづき愛着の強い所に引かれて身を受けるもなり。その好む所が仏菩薩の世界であれば仏菩薩の世界に身を受けるようになり無限の楽しみを得るであろうが逆に貧嗔痴が強ければそこで身を受け、無量劫を通じて無数の苦しみを受けるようになるだろう。諦聴せよ。

〇〇よ、更に開け。汝この重要な時にあたってなお一層心を堅持すべきである。もし少しでも愛着貧着に引かれれば自ずと悪道に陥っていくであろう。一度この悪道に墮すればいつまた人の身を受けて聖賢の会座に参加し、大業を成し遂げて無量の憲福を享受することができようか。

〇〇よ、諦聴諦聴。善思念思。

【薦度法門】 敬語本

〈涅槃前後に後生を引導する法説〉

〇〇のみたまよ 心して仏の法説をよくお聞きなさい。善悪いずれにせよ、みたまが現世でお受けになった業報は皆前世でみたま自身が作り出された業因によるものであり、現世で作り出された業因は来世にまた受けるべき業報となるもので、これすなわち大自然の天業である。仏と祖師は自性の根本を覚得され、心の自在を得られるゆえ、天業を破し六道・四生のいずれにでも生まれ変わることに無障になさるが、凡夫と衆生は自性の根本を知らず、心の自由を得ざるため、天業にひかれて無量苦を受けるようになる。斯くの如き仏と祖師、凡夫と衆生、貴賤と禍福、寿命の長短等はすべてみたま自らがつくったもの也。

〇〇のみたまよ、一切万事すべてみたまが作り出したものであることを今明瞭に知り得たか。

〇〇のみたまよ、さらに聞け。仏もみたまも一切衆生も、生死の理は皆同一であり、本性もまた同じ本然清浄な性であり円満具足な性であ

る。性とは、あたかも大空に輝く月のように本物の月は大空にただ一つあるだけであるが、その月影は一千の江水に映るのと同じく、この宇宙と万物もその根本は本然清浄な性であり、名もなく形相もなく、去ることも来ることもなく、死にかつ生まれることもなく、仏と衆生の区別もなく、虚無と寂滅もなく無いという言葉さえも絶えたもので、有でもなく無でもないそのものゆえ、そこに「有」なるものが無為にして化するがごとく自在に生じ、宇宙は成・住・壊・空に変化し、万物は生・老・病・死を繰返しながら六道四生に変化し、日月は往来して昼夜を変化させるのと同じくみたまの肉体の生死もまた、変化でこそあれ生死ではないのである。

〇〇のみたまよ、よく聞き知れ。性の本来をはっきりと悟り得たか。また聞き知れ。これからみたまはこの身を捨て新しい身を受くるが、それはみたまが平素作り出した業因に従って愛着が強い方に引かれて行ってその身を受けようになるものである。その好むところが仏菩薩の世界であればそこで身を受けて無量の楽を得るであろう、逆に貧嗔痴強ければそこで身を受けて無量億劫を通じて無数の苦を得るであろう。諦聴せよ。

〇〇のみたまよ、更によく聞け。この時に臨み心をなお一層堅持すべし。

もしわずかでも愛着や貪着が残っておれば自ずと悪道に陥るであろう。一度この悪道に墮すれば、いつの世に再び人身に生まれ変わり、聖賢の会座に参席し大業を成し遂げ、無量の慧福を享受することができようか。

〇〇のみたまよ、諦聴諦聴。善思念思。

7. 涅槃式が終わる前に、泣哭の音声を出さないように。

8. 涅槃式が終わった後には、カーテンなどを張り屍体室を整理して、その前に写真を奉安して弔問（編喪）を受けて、時に読経・念仏などをするように。

第三節 護 喪⁹⁾

1. 葬儀のはじめから終わりまで、喪葬を保護して事務処理するために護喪所をおくもので、親戚・親友の中で経験ある人を護喪と委員を定めて、一切の喪葬に関する内務・外務・応接・儀式・喪具・葬役・会計等あらゆる仕事を分担して、香典録・弔客録・喪中の日記などを記録して、後日喪主の備忘に対応できるようにしなさい。
2. 親戚知り合いの中で、お互い縁がある所には訃告を発送し、弔慰は生前の厚誼によって直接参詣することが当然だが、万一遠くの場所において参詣できない時には弔電・弔状等で慰問するように。
3. 訃告と弔状等は新旧、状態にあわせて文書を選択して、礼に合うようにしなさい。
4. 親戚知り合いは生前の厚誼によって、各自の意志・経済・生活に見合った尺度で金銭にて香典をさしだすように。
5. 喪家で火をおこして通夜（焚薪達夜）する旧習は廃止して、燈燭を家屋周囲に明らかに照らすように。
6. 喪主の喪に服して（散髪）したり、服の片袖を脱いだり（裡衣）、はだしになったり（跳足）等の旧習は廃止するように。
7. 教会葬やその他公的な葬儀に該当する喪事の時には、常に葬儀委員会の指示によってその手順を尊重するように。

第四節 入棺及び入棺式

1. 入棺は、襚衣と棺が用意されるにあわせ行い、着衣する前に屍体を貞潔にしなくてはならず、着衣した次に、屍体を縛る旧習は廃止するように。

9) 日本でいう葬儀委員長的作用のひと。

2. 襦衣は敢えて高級で新しく製造するものでなく、当人の衣服中で貞潔なものを選択して着衣させ、生前の礼服でも外出着の服飾と同じにするように。
3. 棺の長広はタツプリと余裕をもって製作し、屍汁が洩れないようにしっかりと調えるように。
4. 入棺する時に、衾布や面布等の補助物の使用は、慣例と必要によって適宜するように。
5. 入棺が終了したならば、棺布を覆って、カーテンなどを張って、霊柩室を整理した次に、その前に写真を奉安して関係人が一斉に集まって入棺管式を挙行し、1. 開式 2. 入定 3. 心告（礼文24） 4. 献盃 5. 聖呪（礼文3） 6. 薦度法門（礼文4・5） 7. 読経（誓願門・心経） 8. 念仏（5分乃至10分間） 9. 閉式の順に行うことです。

【一円相誓願文】

一円相は、言語道断の入定処、有無を超越した生死の門であり、天地・父母・同胞・法律の本源、諸仏・祖師・凡夫・衆生の本性（性稟）である。よく保もって有常となり、よく保もって無常となる。有常よりみれば常住不滅、如如自然にして無量世界を展開し、無常よりみれば、宇宙は成・住・壊・空に、万物は生・老・病・死に、四生は各心身の作用に従って六道に変化し、あるいは進級に、あるいは降級に、あるいは恩が害より生じ、あるいは害が恩より生じて、無量世界を展開している。ゆえにわれわれ愚かな衆生は、この法身仏一円相にのっとり、心身を円満に守護する勉強と、事理を円満に悟る勉強と、心身を円満に作用する勉強に精進して、進級して恩を受けこそすれ、降級して、害は受けないようにして、一円相の威力を得るよう誓願し、一円相の体性と合するまでになれるよう誓願する。

6. 閉式後には、涅槃標旗（礼文76）を霊柩室前に掲げ、運喪（出棺）する時に葬列の先頭に行進するようにして、葬儀後には霊位奉安所前に掲げ、斎後おさめ、宗師・大奉道・大護法・大喜捨等法勲者の涅槃標旗（礼文77）には、法号・法勲のみ

表記するように。

第五節 告別式及び出棺運喪（葬列）

1. 出棺は、特別な場合を除いて涅槃後第三日目に行なうことを原則として、式場は教堂または自宅で設え、告別式は写真あるいは位牌（礼文78）を前に挙行し、1. 開式 2. 着服及び告由文（礼文25） 3. 喪主代表告辞（礼文26・27・28） 4. 心告（礼文24）及び一同敬礼 5. 聖呪1編 6. 薦度法門（礼文4・5） 7. 読経（誓願文）及び祝願文（礼文29） 8. 閉式の順とするように。

【告別式服喪告由文】

私ども親戚または同志の関係で服製の定める所に従って各々該当する喪に服しますのでみたまよ、ご照鑑ください。

【告別式告辞〈共用〉】

〇〇様、〇〇様がにわかに涅槃に入られたとのこと、なおも信じられないこの訃音に接し、私共はただ茫然自失悲嘆にくれるばかりです。私たちをこれまでに保護訓育してくださったその誠心とご苦労は如何ばかりでしょう。山よりも高く海よりも深いそのご恩を思うとき報恩の機会を失った今、たゞ断腸の悲しみに身もだえるばかりです。

しかし、お側に仕えて報恩する道はかなわずとも平素の教訓と願力をひたすら奉じ、終身報恩の道に精進する所存ですから、〇〇様、すべてを乗り越えられ清浄な一念になり、再び法縁の導きによって一日も早くこの地にお戻り頂きますよう。

2. 告別式次中、状態（都合）によって入定・略歴報告・説法・弔辞・一般焼香・弔歌などを加えて行なうことができ、喪章着服及び告由文は服製の定めたところによって各々服票を着けたのちに、主礼が告由文を代読して着章人が一斉に霊前に二拝し、祝願文は主礼が朗読した次に、喪主らが本席で主礼と共に仏前に四拝するように。
3. 告別式の喪主代表告辞（礼文26・27・28）は状態（都合）によって加減して用い、

その他関係人の告辞は省略することを原則とするものの、場合によって、特に朗読する必要がある時には喪主告辞に準して、境遇に合うように簡潔に製作するように。

4. 告別式祝願文（礼文29）中に「涅槃人は平素に天性が」から「修行があったので」までは一例を表示したことであるので、この他の特別な点があれば敷衍して記入し、なければ略し、全てのものを事実にして少しも虚讃を加えず、法階正師以上になった分義の場合には、全文を境遇に合うように適宜加減し、特に「邪見を捨てて正見を持ち」から「道德の因縁を離れず」までの部分は省略するように。

【告別式祝願文〈初斎七斎共用〉】

円紀〇〇年〇月〇日、円仏教〇〇地方礼監〇〇は新涅槃人〇〇の告別式にあたり、浄心斎戒謹んで法身仏四恩の尊前にその薦度発願を申しあげます。法身仏四恩よ、新涅槃人〇〇は平素天性が（何々）であり、操行は（何々）で、公益の面では（何々）の事業をなし、道門に入ってから（何々）の信心と修行があったので、本人の一生を通じて作った若干の善根を参酌し、またその（子女）〇〇外一般家族の至誠と同志親友たちの共同発願を広く察し、涅槃人の霊に覆いかぶさっている悪業が少しでも残っていれば真如の法力でこれを除滅し、その靈路を無明が遮っている時には、般若の慧光を照してお導きくださり、邪見を捨てて正見を持ち、束縛を解いて解脱を得、悪道輪廻に陥らず、ただちに仏土樂地に戻り、生を受けるたびに人間の身を失わず、三世を通じて道德の因縁を離れず、末永く正法の修行に精進し一成仏済衆の大果を円満に成就できるようにしてください。

一心に祈念し四拝して伏して申し上げます。

5. 閉式すれば直ちに出棺するが、運喪中薤露や哭声は廃止して厳粛に進行するよう。
6. 運喪する時には、涅槃標旗・写真・花輪等を靈柩の前面に出して、靈柩の後には喪主・親族・恩族等、関係者と一般弔客が秩序あるように列を建てて行進するよう。
7. 葬儀時の奏楽と葬列の莊嚴等は、その時の一般慣例と喪家の状態（都合）と涅槃

人の場合によって文義に合うように簡素にするように。

第六節 入葬式及び葬事

1. 靈柩が葬地にたどり着いて、火葬ならば点火後、土葬ならば平土後に入葬式を挙行し、

1. 開式 2. 心告（礼文24）及び一同敬礼（2 拝） 3. 聖呪 1 遍 4. 読経（心経） 5. 永訣辞（礼文30） 6. 閉式の順とするように。

【入葬式告別辞（永訣辞）】

〇〇のみたまよ、地水火風の四縁の集りであったみたまの形体はその四縁途絶え、眼耳鼻舌身意六根も今はその名色を失いました。それと共にみたまのものであった一切の財色も名利もみたまにとっては、はかない一場の夢となりました。親しい知己も家族たちも皆過ぎし日の面影を探し求めることができませんので、思い起したとて何の利があり、愛着したとて何の効がありましょうか。みたまの過去の一生は苦楽榮枯を問わずすでに終ってしまったので、過去に抱いていた世間的愛着はきれいに払い去り、ひたすら生滅去蒸、妄想煩悶もない本然の其の主を求めて、来世には必ず仏果を得、大衆を益すると共に、今生で交わった一切の善縁と仏土極楽で再会して一緒に適業を成就されるよう心から御祈念申し上げます。

2. 法階正師以上となった方の入葬式には、永訣辞（＝告別辞）（謝意）の朗読は省略するように。

3. 葬事は土葬と火葬の2種類の中で状態（都合）によって選択するが、土葬にも在来式に墳墓を作る法と平土後四角または円形で平らな壇を作って、その中央に標石を建てることもあり、火葬にも遺体を破碎して、貞潔な山に散らしたり、澄んだ水に浮かす法と、前の土葬法と同じく成墳する法と、塔を立てて塔中に奉安する法があるので、場合と状態（都合）によって文義に合うようにする。

4. 埋葬地は、過去の風水説によった子孫の禍福を論する習慣は廃止して、状態（都

合)によって適当な場所にするように。

5. 葬儀後には涅槃人の写真や位牌(礼文78)を貞潔な室内に四十九日間奉安して、喪主と各関係人が随時念仏・読経等でその薦度を祈願するように。
6. 在来式の霊位の設置や、虞祭・朝晩朔望上食・小祥・大祥等一切の煩雑な礼は廃止するように。

第七節 忌服制

1. 忌服制は、全期服と半期服と当日服があるが、全期服は四十九日(七・七日)間、半期服は二十一日(三・七日)間着服することであり、当日服は葬儀当日服喪することです。
2. 全期服は、父母・子女・夫婦間をはじめとして、内外の中三親等間まで服喪し、半期服は涅槃人の親族・戚分と普段厚情があったその他の関係人が自発的に服喪することであり、当日服は一般弔客が葬儀日に限って服するものです。
3. 喪服は一律に普段着または普通の礼服の左胸に喪章だけをつけることです。
4. 教会葬等公的な関連によって、服する忌服が二項に定めた期間と相差する場合には、より長期の忌服にすることです。
5. 忌服中、繰り返し喪ができた場合にも喪章は一つだけを着け、重複した喪章は大切に保管して各々該当の脱(除)服の礼を行なう時に使用するように。
6. 半期服の人は三・七斎に参詣して、脱(除)服の礼を行い、三・七斎に参詣できない場合には、各自の処所で、脱服した後、終斎式に参詣して、全期服の人と共に脱服の礼を行なうように。
7. 忌服中には、追慕する正心で心身をより一層斎戒し、行動を特に謹慎するように。

第七章 斎

第一節 斎について

斎は涅槃人の薦度のために行う法要であり、初斎から終斎に達するまで七・七献斎を続けるようにすることは、涅槃人の靈魂がおおよそ約七・七日間中陰にあっている途中で、それぞれの業縁をなぞって、新しい身に収まるようになるので、その間頻繁に読経祈願等で清浄な一念を入れるようにして、残った執着心を解いて、善道受生の縁を深め、同時に献貢等で靈魂の冥福を増進させようとすることであり、またあらゆる関係人にとって、この各期間で追悼・居喪の霊を守ろうということである。したがって斎を行う者は、この二種類の意義に留意して、どれ一つにも欠陥がないように、あらゆる誠意を尽くさなければならない。

第二節 初斎及び七斎

1. 涅槃日から七日目になれば霊位奉安所または教堂で初斎を挙げて、七日ごとに七斎を挙げるが、
 1. 開式 2. 入定 3. 献貢及び斎主献盃 4. 心告げ及び一同敬礼 5. 聖呪三編 6. 薦度法門（礼文4・5） 7. 読経（誓願文・心経）及び祈願文（礼文29） 8. 半期服の脱服と献盃（三・七斎） 9. 閉式の順にするように。
2. 初斎及び七斎の祈願文は、告別式祈願文を準用して、初斎及び七斎の式次中、特別な場合には入定に続けて法供歌（聖歌46）、聖呪に続き念仏七遍、祈願文に続き説法を行なってもよい。

第三節 終 斎

1. 涅槃後四十九日、すなわち七・七日になれば終斎を挙げるが、
 1. 開式 2. 入定 3. 略歴報告 4. 法供歌（聖歌46） 5. 献貢及び斎主告辞（礼文31・32） 6. 心告及び一同敬礼 7. 聖呪（3編）及び念仏（7編） 8. 薦度法門（礼文4・5） 9. 読経（誓願文・心経・懺悔文・金剛経）及び祈願文（礼文33） 10. 説法 11. 一般焼香 12. 脱服及び告由文（礼文34） 13. 献貢報

告 14. 慰霊歌（聖歌44-52その他） 15. 閉式の順とするように。

【終齋祝願文】

円紀〇〇年〇月〇日、円仏教〇〇地方礼監〇〇は故〇〇の涅槃後四十九日終齋にあたり、浄心斎戒し、謹んで法身仏四恩の前に故人の薦度を発願します。法身仏四恩よ、涅槃人は平素天性（何々）で、操行（何々）であり、公益の面では、（何々）の事業をし、道門に入ってから（何々）の信仰と修業がありましたので、本人の一生を通じてなし遂げたいくらかの善業を認め、またその（子女）〇〇をはじめ一般家族の七・七献斎によって現われた至誠と同志親友たちの共同発願で見せた善意とを参酌してください。特に今日この四十九日は涅槃人〇〇が中陰から去って行く重要な期日ですが、いまだ修行の浅い衆生界において如何に自力による天業の突破を望み得ましょうか。幼児は病気にかかれば親を呼び、迷う霊識は冥路に至ればまず仏の救援を求めるもので、大慈大悲の法身仏四恩よ、これ霊すべての情景をあわれみ、加護の恵みをたまわって、涅槃人の霊根に少しでも業障が残っておれば真如の法力でこれを清掃し、その霊路を無明が遮っておれば般若の恵光で導き、邪見を捨てて正見を持ち、束縛を解いて解脱を得、悪道輪廻に陥らず、たゞちに仏土楽地に立ち戻り、生を受けるたびに人の身を失わず、三世を通じて道德の因縁から離れず、正法の修行に末永く精進し、遂に成仏済衆の大果を成就するようにしてください。

一心をこめ四拝して伏してご祈念します。

【終齋除服告由文】

私ども親戚または同士の服制の定めにより各々喪に服していましたが、只今除服しますので尊霊よ、照鑑ください。

2. 終齋式次中、略歴報告は涅槃人の生長・学歴（学力）・経歴・入信・法法階・事業・子女等に関する事項と涅槃及び葬儀経過の概要を詳細に報告しなくてはならず、読経は時間の状態（都合）によって懺悔文の代わりに懺悔偈（礼文7）を3編と金剛経は略するか5章まで読誦するように。

【懺悔掲】

我昔所造諸悪業	皆由無始貧瞋痴
従身口意之所生	一切我今皆懺悔
罪無自性従心起	心若滅時罪亦亡
罪亡心滅両俱空	是即名謂真懺悔

3. 終齋祝願文（礼文33）中に「涅槃人は平素天性…」から「修行がありましたので」までは、告別式及び七齋式祝願文の場合と同じく説明または省略し、法階正師以上の分義の場合には、前文を境遇に合うように加減して使用する。特に「いまだ修行が不足した衆生界にあつて…」から「仏様の救援を求めるように」までの部分は「彼の修行は、たとえ〇〇の聖位にあるとはいえ（いかなる）事情によって、もしも靈識に少しでも無知があるかとこれに至心し、ここに衷心から祝願しますので」等の例にあわせ修正使用するように。

4. 終齋の説法は、状態（都合）によって、薦度法門の次に。読経に先だつて行うことができ、その内容は該当法語を朗読したり、その時の法師が涅槃人の実情にあうように願力と薦度と回向と因縁等に関する道を主として説くように。

第四節 特別薦度齋

1. 涅槃人が特別な薦度のために、齋主の発願によって、涅槃後百日目に百日薦度齋を挙行することができ、または、その外齋主の特別な発願によって単独または合同で過去の涅槃人の特別薦度、合同慰靈齋、または水陸齋などを挙行できるが、百日齋の手順と礼文は概して終齋の礼に準じ、特別薦度齋などの場合は概して、祭祀の礼に準ずるが、読経は終齋の礼に準ずるように。

第五節 齋に関する処理

1. 齋の場所は教堂とすることを原則とするものの、初齋から六・七齋までは自宅の靈奉安所で挙行でき、齋主は終齋日まで靈位奉安所の貞潔と心身の齋戒に長く留意するように。

2. 教堂でも自宅を問わず齋を挙げる時には常に主礼の指導によって行うように。
3. 齋主は参席した大衆に簡素な飲食で供養することは良いが、分不相応の費用をかけることは廃止するように。
4. 献貢は、喪葬または致齋の費用から節約した金額その他特別寄付を仏殿に捧げて、仏事やその他公共事業に使用して涅槃人の冥福を祈るものであるが、齋主はこれを誠意で献貢するように¹⁰⁾。

第十一章 教会葬

第一節 教会葬について

教会葬とは、本教で主喪（喪主）となって喪葬に対する費用と儀式を担当し挙行することであるから、これは、一生をひたすら本教に貢献した専務出身と期限専務出身であっても執務途中涅槃に入った人に対する死後、礼遇方法のひとつであり、期限専務出身としてその期限を既に終えた人と居塵出塵有功者の葬場について、その儀式だけは本教で主管し行礼するもので、その中にたとえ教会全体葬・教会連合葬・教堂葬などの等別はあるが、通称してこれを教会葬とする。

第二節 教会葬儀委員会

1. 教会葬に該当する有功人が涅槃に入った時、中央総部または該当教堂では遅滞なくこと（教規）の定めたところによって、葬儀の等星（級）を定め、それに該当する葬儀委員会を組織して初終一切の行事を遂行せられるようにするように。
2. 葬儀委員会は、一切葬儀に関する内務・外務・応接・儀式・喪具・葬役・会計・記録などのあらゆる仕事を分担して、公私間、関係ある所に訃告を発送して、葬儀に対する行礼儀節を迅速に関係各教堂と各機関に知らせること。

10) 『全書』では、続いて第八章祭祀として各種追善の心得が述べられるが、涅槃（臨終）の儀式とはその意味を異にするため別稿に譲る。

3. 涅槃式・告別式・入葬式・斎等の手順と礼文は家礼編に定めたところに準ずるが、あらゆる行事に常に公家の喪主が私家の喪主に先立って、告辞・祝願文等朗読順も教中名の分を主にして、涅槃標旗も主管教堂に立てることを原則とし、告別式の弔歌と終斎の慰霊歌は教会連合葬までは慰霊歌（聖歌44）と教会葬弔歌（聖歌52）を通用して、全体葬では状況にあわせて新しく制作して応用するように。
4. 葬儀委員会は、四十九日終斎時に、初終諸般の行事における経過と葬儀費用の収支と内訳報告して後、解散するように。

第三節 教会葬儀の手順（儀節）

1. 教会全体葬は元成績・特等有功人に対する葬儀であり、中央総本部が主管教堂になって、総支部各関の全体幹部と教徒代表が葬儀に参席して、一般教徒は葬儀当日その地方の教堂や機関に集まり、追悼及び服喪の式を行い、四十九日には終斎式を行なうように。
2. 教会連合葬は、元成績一等・二等の有功人に対する葬儀であり、中央総部や特別な関係にある教堂によって、該当総支部機関の代表が喪に参席して、該当教堂や機関では、葬儀委員会の指示によってその教堂機関で、追悼及び服喪の式を行い、四十九日には終斎を行なうように。
3. 教堂葬は元成績三等・四等・五等の有功人と在任中涅槃に入った普通出家教徒に対する葬儀であり、涅槃地の教堂が主管教堂になって、涅槃地教堂で服喪・脱服終斎式を行うように。
4. 教会葬を挙げる時には、葬儀当日は該当教堂と機関に一斉に教旗（載旗）を半旗（半掲）にするように。
5. 教会全体葬は状態（都合）によって、地方教堂でも私の自宅で挙げる事もでき、また連合葬や教堂葬を私家で挙げる事ができるが、常に該当葬儀委員会の議決を経て、教団名義で該当主管教堂の主催（主管）の下に行うように。

6. 教堂葬に該当する葬儀でも、場合によって、特別に縁ある他の地方や教徒は、進んで各自の地方教堂で追悼と服喪・脱服の礼を行なうことが可能で、同志・団友等の関係で個人的に自主的に服喪することは制限しないように。
-

おわりに

以上、韓国圓仏教における末期医療における民間医療の応用及び、施設概念の背景にある部材から見た環境構築観念、それを補強する考察として仏像史を概観し、部材の意味を取り上げた。余事であったが、それまで余り注目されなかった医療と深く関係する韓国における薬師如来の像作が長く続くことに触れた。

キリスト教の教線が強い風土にあって現代の仏教が医療にどのように理解・応用されているかの一端を、未邦訳の原文を用い重要部分の抄訳を施した。思想傾向が少し分明となろう。

また、『圓仏教全書』原文より、実際の末期医療施設において読誦、援用される該当箇所を邦訳を試みた。

施設における、空間を満たす「音声」として、また、教導文句として活用されるものの筆者訳である。ご批評賜れば幸甚である。